

# デジタル化の中で立ち止まり 問い直す哲学の姿勢に学ぶ

「分かっていたことを分からなくさせる」という、奥の深い哲学の価値とは何か……。急速に世界のデジタル化や効率化が進む中、変わりゆく社会、経済とともに人はどうあるべきなのか。哲学者の野矢茂樹氏と黒田東彦総裁が哲学的な視点で語り合う。

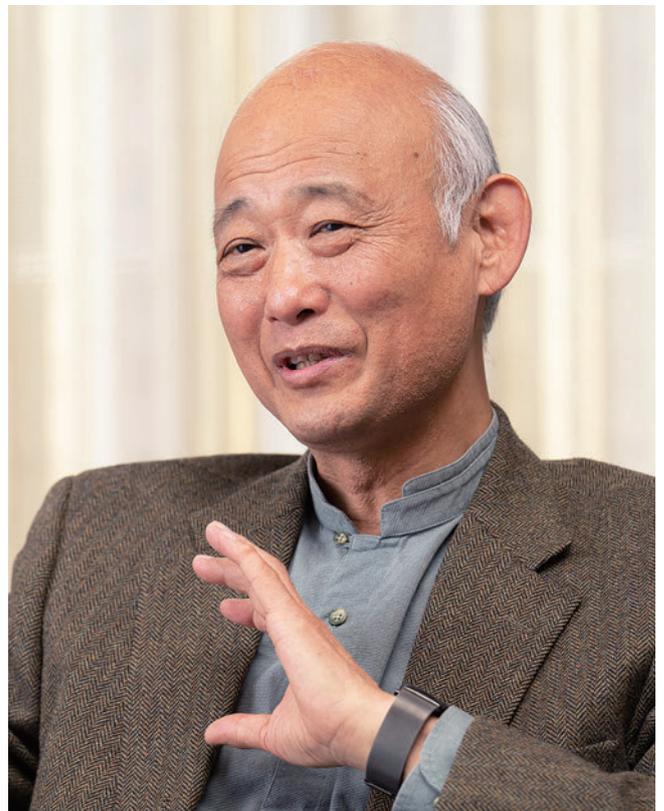


日本銀行総裁

## 黒田東彦

KURODA Haruhiko

1944年福岡県生まれ。67年東京大学法学部卒業後、大蔵省（現財務省）に入省。71年イギリス・オックスフォード大学経済学修士号取得、75年から78年までIMF（国際通貨基金）に出向、96年大蔵省財政金融研究所長、97年同国際金融局長、98年同国際局長、99年財務官、2003年内閣官房参与、同年一橋大学大学院経済学研究科教授（兼務）、05年アジア開発銀行総裁、13年3月日本銀行総裁就任、同年4月同再任、18年4月同再任。



立正大学文学部哲学科教授・東京大学名誉教授

## 野矢茂樹

NOYA Shigeki

1954年東京都生まれ。78年東京大学教養学部教養学科科学史・哲学分科卒業。85年東京大学大学院博士課程単位取得退学。東京大学大学院教授などを経て、現在、立正大学文学部哲学科教授を務める。専攻は哲学。主な著書に2006年『ウイトゲンシュタイン『論理哲学論考』を読む』（ちくま学芸文庫）、10年『哲学・航海日誌Ⅰ・Ⅱ』（中公文庫）、12年『心と他者』（中公文庫）、15年『大森荘蔵—哲学の見本』（講談社学術文庫）、16年『心という難問 空間・身体・意味』（講談社）、20年『語りえぬものを語る』（講談社学術文庫）、22年『ウイトゲンシュタイン『哲学探究』という戦い』（岩波書店）など。

## 新たなものを生み出す 空間を共有する 話し合い

**黒田** 野矢先生とお会いするのは初めてですが、実は哲学や論理学に関するご著書を拝読するたびに、なるほど、そうだと意見が一致し、親しみを感じておりました。本日はデジタル社会における、人々の認識と行動様式などの変化について伺いたいと思っています。

コロナ禍の影響で大学の授業もオンライン化が広がっていますね。対面型の授業とはどのような違いを感じていらっしゃいますか。

**野矢** 同時双方向型ライブ形式のオンライン授業でも「時間」は共有できません。ただ、これは「空間」を共有することはできない。ここで言う空間とは、私を中心に開ける知覚的な空間のことですが、この

空間の共有がわれわれにとってとても大きな意味を持つているのかなど。オンライン授業には教室がありません。教室という場を共有することが、実は意外と大事なことだったのだと思われています。

**黒田** 日本銀行でもオンライン会議が増えましたが、情報交換は十分にできていると思っています。しかし政策などに関わる中枢の会議は、その場に集まって議論をした方がいいという感覚があり、人数を減らすなどして対面で行っています。

**野矢** 新しいことを見いだしたいときには、同じ場を共有するというのがいい効果を生むように思えますね。

**黒田** 最近では、G7のような中央銀行の総裁が集まる国際会議もオンラインから対面に戻っています（二〇二一年十一月現在）。コーヒープレー

クやダイナーの際、さまざまな人と場外でいろいろな非公式の意見交換ができることもメリットだと思っていますが、これはオンラインでは難しいことです。

**野矢** 私は落語が好きで、コロナ禍でお気に入りの落語家がオンライン配信したのを見たのですが、やはり物足りない。落語は寄席という狭い空間で観客に語りかけてくるのが本領だという気がします。こうやって実際にお会いするとうことは、身体が共にこの場に位置していて、動いていく。手を伸ばすと触れられるわけですよ。場合によっては、においなど五感に訴えてくるものがあるかもしれない。ただはつきりはしないのですが、ここが大事なポイントで、対面には親密な空間、皮膚的な感覚があるのだろうなど。それが、親密さへとつながって

いく。もう一つのポイントは、何か新しいことを考えようというときには偶然やノイズがとても大事ということでしょうか。オンラインでは入り込みにくい気がします。

**黒田** オンライン会議では時間も限られていますし、事前に準備した意見をお互いに述べるのが中心になってしまいうことも多いです。それと似ているかもしれませんね。

**野矢** 一方、対面の場合は話が脱線し、揺らいでいく。この揺らぎが新しいものを見いだすのに大切なんです。でも情報の枠組みが決まっていると、あまり揺らいでいけません。たとえば私は授業で、こんな話をします。ここにペットボトルがある、では、実物は目の前にありますかと。実物は目の前にあるとわれわれは思っているわけですが、でも、その認識は脳が見せているイメージ

でしょう。「これはどこにあるの？」とテレビの画面を指しているようなものじゃないですかと。そうすると、実物がどこにあるか分からなくなってくる。さあ、本当に実物とイメージというのは二つに分かれているのでしょいか……と揺さぶり始めるわけです。

### 効率的だが 偶然性に乏しい デジタル社会の課題

**黒田** 今やSNSなどで好きなことを発信できますし、全世界の個人といろいろなやり取りができる。すばらしい進歩ではありますが、展開がバラエティーに富むよりもむしろ、時折炎上が見られるような極端な意見が広がる傾向がありますよね。

**野矢** 多元化してもよさそうなのに、二極化しがちな現象はありますね。虚偽も入り混じっ

てきます。デジタル化で情報を知りやすくなったのは本当にありがたいし、たとえば本にしたってインターネットで注文するのは便利です。でも、買いたい本が決まっている人にとっちはいい売り場だとしても、書店で何かないかとぶらぶらする楽しみや、こんな本があったんだという偶然性を取り込む仕掛けがオンラインストアには乏しい。同じことがソーシャルメディアの情報発信にも言えて、受け手は自分の求めるものを選びます。結果的にスクリーニングして入りますから、気に入った情報しか入ってきませんし、ある人物を支持している人はその人物に対して好意的な記事しか読まなくなる。そうやって偶然性がなくなってきたこの一つではないかと思えます。グローバル化や迅速化、効率

化は必要なかもしれませんが。とはいえ同時に、ローカルな視点や、非効率的と言われるような視点をちゃんと持つっておかなければ、人間としての力がどんどん衰えていくのではないかと思えます。「損して得取れ」という表現があります。経済の世界でもあまり短期的な利潤を求めて効率化していくと、長期的には衰退するようにも思えます。素人考えかもしれませんが、その点はどうお考えですか。

**黒田** 私も全く同じ意見です。リスクを冒して何かをする場合、短期的な利益の追求は難しいと思えますね。

**野矢** 学問の世界も、最近は短期的な成果ばかりが求められるようになっていきます。さらには、文系が軽視されていく。その最たるものが哲学です。哲学を研究していると、それは何の役に立つんですかとい

う質問にしばしば当たります。哲学のように、分かっていたことを分からなくさせることに対して、人は価値を見いだしていく。けれども、分かっていたつもりの方が分からなくなるというのは、実は大事なことだと私は思っています。一つのフレームの中だけで動いていたら、想定外の事態には対処できないし、新しいことを生み出すこともできません。

**黒田** デジタル技術の発達は、経済活動や金融の世界にも非常に大きな影響を与えています。たとえば経済分野でもAIが取り入れられ、海外の金融機関ではさまざまな要素を考慮しながら具体的に融資を判断する試みも始まっています。AIは非常に有益な道具であるのは事実です。しかし融資の話で言えば、多様な判断やデータをAIに学習させたこ



とにより、人がこれまで無意識のうちに行ってきた偏見に近い区別を、むしろ如実に反映してしまうことがわかってきました。結果的に、AIだけではなく融資判断そのものの枠組みについても考え直す必要があるのではないかとこの議論も出てきています。

**野矢** 前の世代のAIでしたら、プログラムされたことしかやらなかった。つまり、マニュアルに従うことしかできませんでした。今はビッグデータを取り込み、そのデータに基づいて学習していきます。そうすると、どうしたって現状追認型になる。現状が変わればAIの対応も変わっていくでしょうが、逆にAIに現状を変える力はないわけです。

AIは非常にいい判断をしてくれますが、まず個人を見ないのが問題です。先ほどの融資のお話で言えば、データ上

のどのタイプの人なのか、ということで見分けるしかない。事実と経験をもとに一般論で動くだけで、個人というものが無い。そしてまた、どうするべきかという規範性がありません。そのため、道徳的には絶対に取りえない判断をAIが導くこともありうる。その点において、どうやってもAIは人間の代わりにはならない。

**黒田** 逆に言うと、代わりにしてはいけませんので、そのメリットを十分生かし、問題があれば、AIのプログラムを人間が変えていかなければいけないということですね。

**コロナ禍を受け止めつつ立ち止まり物事を問い直す**

**野矢** 素朴な質問になります。経済・金融はもともと非物質的でバーチャルな性格も

持っていますよね。そもそもお金はバーチャルなものでしょう。とはいえ現状では、お金は実際に紙幣や硬貨という物としてリアルにそこにあるわけです。それがキャッシュレス化の進展で、よりバーチャル化しているように感じています。現在は日本銀行がお金を安定して使えるようにしていると思いますが、将来は紙幣や硬貨を造らなくなり、数字だけで追うようなことになっていくのでしょうか。その結果として、お金をうまくコントロールできなくなってしまう、経済へ甚大な影響が出てしまうという可能性はないのでしょうか。

**黒田** その点においては大丈夫だと思えますが、キャッシュレスはお金の動きがリアルに目に見えず、コンピュータネットワーク上に誰々のお金がいくらありますという情報

が集まるわけです。ペーパー

による管理でしたら、ばらけて  
いますから一挙にその情報を  
取ることはできませんが、全部  
がシステムに入っていると  
なると、なんらかのトラブルで  
そのシステムがダウンしたり、  
ハッカーにアクセスされたり、  
というときのリスクが巨大だ  
という課題はあります。

**野矢** リスクは分散化しなけ  
ればいけないけれど、情報は  
集中したほうが効率的。効率  
化を目指すのとリスクマネジ  
メントというのは、逆方向の  
部分がありますね。

**黒田** また、たとえば現金に  
は無記名性があります。しか  
し、お金を全て電子化すると、  
誰がどこで幾ら使ったという  
のが、そのシステムを運営し  
ている人には全て把握できて  
しまいますよね。だから、そ  
れが分からないようなシステ  
ムをつくるべきではないかと

いう議論も生まれています。

**野矢** 今、都市部ではこの街  
角にもカメラがあり、監視社会  
のようになっていきます。犯罪  
の抑止力や検挙率には非常に  
有効に作用しているのではし  
ょうが、同時にわれわれは居心  
地の悪さも感じている。今の  
お話は、そういう問題ともつ  
ながりますね。カメラで言え  
ば、別に悪いことをするので  
はなくとも、誰にも見られ  
たくないことであるじゃない  
ですか。私は、疲れてうんざ  
りしちゃうと、近所の山をひ  
とりでぼたぼたと歩くんです。

自分にとってはとても大切な  
ひとときなのですが、そうい  
う誰にも知られない時間や環  
境がどんどんなくなっていく  
のはとても居心地が悪い。裏  
表のある人というのは悪い意  
味で言われますが、表があり  
裏があるのはやはり普通の在  
り方だし、全て表にさらけ出

さなければならぬのはおか  
しいなと思うんですよね。

**黒田** 基本的にデジタル社会  
というのは透明性が高まり、情  
報流通の広がりやそのスピー  
ドが増します。一方で、プライ  
バシーの範囲が狭くなる傾向  
がどうしてもある。とはいえ、  
デジタル化は社会生活や経済  
活動において便利で有益な面  
がありますから、全てを否定  
して昔の生活に戻るのは無理  
だと思います。だから、野矢  
先生が言われたような面も同  
時に考えていかなければなり  
ませんね。

**野矢** たとえばAIが本当に  
支配的になったら人間の出る  
幕はなくなってしまうのか、  
という話がありますが、われ  
われ人間は常識というフレー  
ムを持っている。でもAIは、  
人間のようにできない。フ  
レームそのものを問い直すの  
は、やはり人間の作業なのだ

ろうなと思いますね。

哲学というのは、まさにそ  
ういう思考の枠組みの見直し  
や既存の枠からの脱却を試み  
る、つまり「メタフレーム」的  
な作業をするわけです。これ  
まで皆さんが疑わなかったと  
ころを、哲学者は疑ってみ  
たり問い直してみたり、もう少  
し根本的に考え直してみたり  
します。すぐに成果を生み出  
すものではありません。それ  
でも、立ち止まって問い直し  
てみるという姿勢をもう少し  
哲学から学んだほうがいいの  
ではないかという気がします。

今のコロナ禍は紛れもなく災  
害ですが、それでもポジテイ  
ブに受けとめて考えようとすれ  
ば、世界が強引に立ち止まら  
されている状況も実は大事な  
のかなと思いますね。

**黒田** 本日は、興味深いお話  
をありがとうございました。